

フェミニスト現象学における身体図式と習慣的身体

メルロ＝ポンティに関する藤高和輝の議論から

山田 達也

1. はじめに

フェミニスト現象学においては、現象学の議論、とりわけメルロ＝ポンティの身体論（なかでも、『知覚の現象学』）がしばしば利用される。それはトランスジェンダー身体を扱うときも例外ではなく、例えば論者の一人である藤高和輝は「習慣的身体 *le corps habituel*」「身体図式 *le schéma corporel*」といった言葉を用いて議論を進めている。そこでメルロ＝ポンティの理論は重要な立脚点をなしている一方で、ところどころ語義が転用されていたり、あるいは異なる術語が同一視されていたりする場面も散見される。

メルロ＝ポンティの議論がストレート男性の身体のみを扱っていることについては、フェミニスト現象学の文脈でしばしば注意が促されてきた¹。つまりトランスジェンダー身体に対して彼の議論を直接適用できるかどうかは当然自明ではなく、必然的に議論や用語の読み替えが必要となる場面が生じることになる。その読み替えは、一方ではフェミニズム思想の支柱の一つとなり、他方現象学においては元のテキストを異なるやり方で読解することを可能にするという意味で有益なものとなるだろう。しかしそのためには、元の文脈をどこまで利用できて、どこに限界があるのかを正確に見極めることが必要となり、また戦略的に議論を踏み外す場合、それが何のために行われるのかが明確になっていなければ、踏み外す意義が失われてしまうことになりかねない。

本稿で試みるのは、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』で展開した議論に立ち返ることによって、トランスジェンダー身体に対するその議論の適用をより正確なものにすることである。そこでまず、藤高の議論にメルロ＝ポンティがどのように利用されていたかに触れて「習慣的身体」「身体図式」という語の用いられ方を確認する。

2. 習慣的身体と身体図式——藤高の整理から

藤高がメルロ＝ポンティを援用して議論するのは、その著書『ノット・ライク・デイス』²に

¹ 中澤瞳「フェミニズムとメルロ＝ポンティ——規範を生きる身体の実験」『メルロ＝ポンティ読本』法政大学出版局、2018年、p. 320–21。

² 藤高和輝『ノット・ライク・デイス——トランスジェンダーと身体の哲学』以文社、2024年。

おいてである。まず、本書の展開がどうなっていたかを検討しよう。

藤高は、ジェイ・プロッサーを引用することで、トランスジェンダーを説明する際によく用いられる「心の性」という言葉を批判し、「身体イメージ body image」によってその状態を捉えることから議論を始める³。DSM-IV⁴の記述から、トランスジェンダーは「身体的性とは反対の性になりたい人だ」⁵（傍点原文）と見なされてきており、現実としての身体と「妄想」としてのアイデンティティを対置することで、トランスジェンダーの性別違和はあくまで「心の問題」として扱われてきたのだ⁶。しかし実際には、プロッサーが述べるように身体イメージは単に妄想なのではなく、トランスの人々にとっては物質的な力を持っているのであって、また自らの物質的身体には備わっていないはずの身体を幻影肢のように感じる者もいると藤高は指摘する⁷。したがって、物質的身体を現実、身体イメージを非現実に割り当てる構図を批判することが必要になる。

そこで利用されるのがメルロ＝ポンティが『知覚の現象学』において展開した、幻影肢に関する議論である。そこで彼が導入する「習慣的身体」、そしてもう少し後の箇所では扱われる「身体図式」という言葉を、藤高はプロッサーの引用で用いた身体イメージという言葉と同一視して議論を進める⁸。メルロ＝ポンティの議論では習慣的身体が現勢的身体 *le corps actuel*⁹ に優越するものとされることを指摘し、これを身体イメージの議論と接続することによって、先に述べたような物質的身体＝現実性、身体イメージ＝非現実性という割り当てに反駁する。そしてさらに、身体イメージ・習慣的身体・身体図式を、「感じられた身体」と呼び直すことで物質的な力が含まれていることを強調し、「『感じられた身体』は『物質的身体』によって決定されているわけではなく、むしろ、『物質的な身体』の方がこの『感じられた身体』を介して生きられるということだ」¹⁰と結論付ける。

注意しなければならないのは、藤高が三つの術語を同一視していることである。これについては、幻影肢についてのメルロ＝ポンティの議論を確認するにあたって「『習慣的身体』とはさしあたり『身体イメージ』や『身体図式』のことであり、『現勢的身体』とは『実際の物理的

³ *Ibid.*, p. 41–42.

⁴ Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders『精神疾患の診断統計マニュアル』の、1994年に出版された第4版。まだ「性同一性障害 gender identity disorder」という呼称が用いられており（2013年に出版された第5版では「性別違和 gender dysphoria」へと名称が変更された）、藤高はあえてこの版を用いている。

⁵ 藤高、前掲書、p. 47.

⁶ *Ibid.*, p. 46–49.

⁷ *Ibid.*, p. 43–45.

⁸ *Ibid.*, p. 51.

⁹ 世界に実際に現れている身体のことを指す術語。『知覚の現象学』において、習慣的身体と対の概念として導入される。

¹⁰ *Ibid.*, p. 53.

身体』という程度の意味だと解していいだろう」¹¹と述べるにとどめ、いかなる意図のもとで同一視しているのかということは明示していない。確かにプロッサーの議論との接続が容易になるという利点はあるが、この読みは正当だろうか——あるいは、他の読みをする余地はないのだろうか。そこで次節では、『知覚の現象学』に立ち返ることによってその用語法を検討しよう。

3. 身体イメージ、習慣的身体、身体図式

この議論を始めるにあたって注意しなければならないのは、メルロ＝ポンティは「身体イメージ」という語を用いていないことである。これはポール・シルダーが身体図式の議論から発展させた概念であり、身体の知覚および想像、情動をも含む包括的なものであるが、シルダー以来今日に至るまで、その理論的区別は曖昧だった。田中はこれを意識の志向対象となるかどうかという点から区別し、「私の身体」として意識しうる可能性を含み、また一人称的な要素をもつものが身体イメージ、そしてそれ自体は意識の対象とはならず、運動や知覚を成立させるシステムないし全身のモデルが身体図式というように改めて定義しなおしている¹²。本稿ではまずメルロ＝ポンティの議論を礎とするため、習慣的身体および身体図式がどのように扱われているかを確認することを優先する。

メルロ＝ポンティは、習慣的身体および現勢的身体という二つの層を次のように説明する。

われわれが拘うケースでは、知の両義性は習慣的身体と現勢的身体という二つの区別された層として我々の身体が構成するものに帰着する。前者の層では後者の層から消失した所作が現れており、どのようにして私がもはや実際には持っていない四肢を備えているように感じられるのかという問題は、どのようにして習慣的身体が現勢的身体を保証することができるかという問題になる。もはや実際には動かしえないにもかかわらず、どのようにして私はその対象を操作可能なものと知覚できるのか。操作可能なものが、実際に私が操作するものであることをやめ、ひとが操作可能なものになっているのでなければならず、また操作可能なものが私にとって操作可能であることをやめたとしても、即自的に操作可能なものとして現れていなければならない。相関的に、私の身体は瞬間的で個別的で充実した経験の内だけでなく、ある非人称的な存在として、一般的なアスペクトのもとでも捉えられなければならない。

Dans le cas qui nous occupe, l'ambiguïté du savoir se ramène à ceci que notre corps comporte comme deux couches distinctes, celle du corps habituel et celle du corps actuel. Dans la première figurent

¹¹ *Ibid.*, p. 51.

¹² 田中彰吾「身体図式と身体イメージの区別——その現象学的考察」『日本心理学会大会発表論文集』、第74巻、2010年、p. 3。

les gestes de maniement qui ont disparu de la seconde, et la question de savoir comment je puis me sentir pourvu d'un membre que je n'ai plus en fait revient à savoir comment le corps habituel peut se porter garant pour le corps actuel. Comment puis-je percevoir des objets comme maniables, alors que je ne puis plus les manier ? Il faut que le maniable ait cessé d'être ce que je manie actuellement, pour devenir ce qu'on peut manier, ait cessé d'être un *maniable pour moi* et soit devenu comme un *maniable en soi*. Corrélativement, il faut que mon corps soit saisi non seulement dans une expérience instantanée, singulière, pleine, mais encore sous un aspect de généralité et comme un être impersonnel.¹³

(斜体は原文)

先述の通り、習慣的身体が現勢的身体に対して優越するものであるという立場が明確に表れている。そして、習慣的身体における幻影肢が「即自的に操作可能」とされている点に注意しなければならない。ある瞬間、あるいはある動作において操作可能であるか、どのように操作したかというのと同様に、それ自体操作可能なものとして現れてくることが知覚の条件となっているのである。

他方、身体図式という語にメルロ＝ポンティが触れるのはもう少し後の箇所である。彼はまずアロヒリー-allochirie¹⁴の症例をあげて次のようにいう。

それ〔手の諸点〕はつまりある体系を形成するのであり、私の手の空間は空間的価値のモザイクではないのだ。同様に、私の身体の総体というものは私にとって空間内に並置された器官の寄せ集めではない。私は、分割されない所有の内ですれを保持するのであり、私は四肢それぞれの位置をそれらが包み込まれている身体図式によって理解するのだ。

Ils [les différents points de la main] forment donc un système et l'espace de ma main n'est pas une mosaïque de valeurs spatiales. De la même manière mon corps tout entier n'est pas pour moi un assemblage d'organes juxtaposés dans l'espace. Je le tiens dans une possession indivise et je connais la position de chacun de mes membres par un *schéma corporel* où ils sont tous enveloppés.¹⁵

(亀甲括弧・ブラケットは筆者の補足、斜体は原文)

ここで重要なのは、身体に生じた諸感覚が連合して身体図式を構成するのではなく、むしろ身体およびその位置が身体図式によって包括されているという点である。また、彼は自ら身体

¹³ Merleau-Ponty, Maurice, *Phénoménologie de la perception* [1945], Gallimard, « Tel », 2002, p. 97-98. 以下、引用に付した訳文はすべて筆者による。

¹⁴ 感覚体側転倒とも呼ばれる、右手に受けた刺戟を左手に感じるというような症例のこと (*Ibid.*, p. 114. なおこの説明にあたっては、訳書第1巻 p. 340 における訳注も参考にした)。

¹⁵ *Ibid.*

図式と幻影肢の関係についての説明も加えており、それは以下のようになっている。

幻影肢という現象を主体の身体図式と結び付けて明らかにしようとするとき、身体図式が習慣的な体感の残滓であることをやめ、その構成法則となるのでなければ、脳の痕跡や再生する感覚による古典的説明に何かを加えることはない。もしこの新語を導入する必要性を感じたとすれば、空間的かつ時間的統一性、相互感覚的統一性あるいは身体感覚＝運動的統一性が正しいものであり、それは我々の経験の過程で実際かつ偶然に連合された内容にはとどまらず、そしてその統一性は、ある意味ではそれに先立ち、その連合をまさしく可能なものにするということを言い表すためだ。

Quand on veut éclairer le phénomène du membre fantôme en le reliant au schéma corporel du sujet, on n'ajoute quelque chose aux explications classiques par les traces cérébrales et les sensations renaissantes que si le schéma corporel, au lieu d'être le résidu de la cénesthésie coutumière, en devient la loi de constitution. Si l'on a éprouvé le besoin d'introduire ce mot nouveau, c'était pour exprimer que l'unité spatiale et temporelle, l'unité intersensorielle ou l'unité sensori-motrice du corps est pour ainsi dire de droit, qu'elle ne se limite pas aux contenus effectivement et fortuitement associés dans le cours de notre expérience, qu'elle les précède d'une certaine manière et rend justement possible leur association.¹⁶

これらの記述を踏まえると、確かに「実際に存在する身体部位に優越するもの」という意味では、習慣的身体も身体図式も同様である。しかし、ひとつの現前としての前者と、身体を統合するものとしての後者では明確に審級が異なるのであって、メルロ＝ポンティの議論においては、両者は明確に異なる意味を持たされているということができよう。

本稿で試みるのは、この区別を温存したままトランスジェンダー身体を考察することによって、その実態をより正確に把握することができるということを、そして藤高が展開した「感じられた身体」についての議論を精緻化することができることを示すことである。そこで次節では、身体における時間性および運動性について論じる。なぜならば、習慣的身体は不可避免的に旧い現在との関係を持ち、また身体図式の運動性については、メルロ＝ポンティの説明の中で重点が置かれているからである。『知覚の現象学』の記述を確認したのち、これらがトランスジェンダー身体にどのように現れているかを検討しよう。

4. 習慣的身体の時間性——トランスジェンダー身体の特異性

まず、習慣的身体における時間性について確認しよう。メルロ＝ポンティは、先に引用したように習慣的身体と現勢的身体という語を導入した直後の部分で、幻影肢が精神分析における

¹⁶ *Ibid.*, p. 115.

抑圧 *refoulement* と関わりと述べている¹⁷。つまり、客観的な時間としての「過去」に生じた出来事が「現在」に影響を及ぼしているのだとしても、その症状は時間経過によって消滅するものではないのであり、それを例えば記憶と同列に扱うことはできない。彼はその理由を次のように説明する。

もちろん、記憶が古い経験のある描写として我々の前に並べる一方、我々の真の現在でありつづけるこの過去〔固着〕が我々から遠ざかるのではなく、我々のまなざしの背後に常に隠され、まなざしの前に並べられることがないという限りにおいて、この固着は記憶とは混同されるものではなく、それを排除するものですらある。トラウマの経験は表象の形で、客観的意識の様態の中で日付を持った瞬間として残存するのではなく、存在の様式として、ある一般性の程度の内にのみ生きながらえることが本質的なのだ。

Bien entendu, cette fixation ne se confond pas avec un souvenir, elle exclut même le souvenir en tant qu'il étale devant nous comme un tableau une expérience ancienne et qu'au contraire ce passé qui demeure notre vrai présent ne s'éloigne pas de nous et se cache toujours derrière notre regard au lieu de se disposer devant lui. L'expérience traumatique ne subsiste pas à titre de représentation, dans le mode de la conscience objective et comme un moment qui a sa date, il lui est essentiel de ne se survivre que comme un style d'être et dans un certain degré de généralité.¹⁸

ここで、「真の現在」と述べられていることに注意しなければならない。古い現在などを含む各現在とは、直接的な過去と近接した未来でできた自らの地平を通じて可能な時間の一般性を捉えることで、諸瞬間の分散を乗り越える¹⁹。そしてそれは、日付を持つようなある客観的時間の内にあるのではなく、存在の様式であるという点が重要なのだ。

加國はこれを踏まえて「現在に統合できない過去が残存している状態が幻影肢」²⁰とまとめるが、メルロ＝ポンティの言葉にもあるように、それが一度は経験されている「過去」であるということを見做することはできない。習慣的身体が現勢的身体に優越するといっても後者から前者への働きかけがないというわけではなく²¹、両者が相互に影響することによって始めて、その身体は非人称的なものとして、一般的な様相の下でとらえられることになる。

ここにおいて、トランスジェンダー身体はどのように扱うことができるだろうか。一つ問題を指摘するとすれば、習慣的身体と現勢的身体の相互関係であろう。幻影肢は、少なくともそ

¹⁷ *Ibid.*, p. 98.

¹⁸ *Ibid.*, p. 98.

¹⁹ *Ibid.*, p. 100.

²⁰ 加國尚志「『知覚の現象学』第一部——世界内存在としての身体」、松葉祥一・本郷均・廣瀬浩司編『メルロ＝ポンティ読本』、法政大学出版局、2018年、p. 61。

²¹ Merleau-Ponty, *op. cit.*, p. 98–99.

の肢を失うまでの期間にあっては、その肢の存在が現勢的身体と齟齬をきたすということは当然なく、肢を失ったのちに両者は対立する。幻影肢が消失する条件は様々であり、例えばメルロ＝ポンティが紹介している例でいえば、当初巨大だった幻影肢が次第に小さくなっていき、自身の切断手術に同意したそのとたんに幻影肢が収縮してその断端に収斂するというケースすらある²²。これは、現勢的身体と習慣的身体の相互作用の内で対立が解消したと考えることもできるだろう。

他方、トランスジェンダーにとって——特にトランスセクシュアルと呼ばれるような、侵襲的な性別適合手術（Sex Reassignment Surgery, 以下 SRS）を望む人々にとって、現勢的身体と習慣的身体は強い対立状態にある。そして SRS やホルモン治療といった手段がその対立を解消するとき、それは現勢的身体への直接的介入なのであって、両者の相互関係の中で対立が解消したわけではない。むしろすべてのトランスジェンダーがそうだというわけではなく、当初 SRS を望んでいたけれども治療を進めるにつれてその意思が変化する者やその逆もいて、その実情には幅がある。特にホルモン治療は年単位のスパンで漸進的に身体を変化させていくものであり、その過程において自らの身体の捉え方が変化するとすれば、それは現勢的身体と習慣的身体の相互関係における対立の解消だといえよう。また、こうした相互関係を重視する場合、トランスジェンダーの主体は「自らの主観ではグロテスクな自らの姿を、あるがままの現在の自分として受け容れなければならない」²³とするような議論も生じて来る。こうした在り方はひとつの戦略として十分機能しており、また男女二元論に乗らないことによって攪乱的な地位を持つという立場は、比較的よく取られるものである²⁴。しかしやはり、それは全てのトランスジェンダー主体に共通するものではない——あくまで SRS を望み、現勢的身体へと直接介入することを選択する者もいる。この意味において、あらゆる主体に対して現勢的身体と習慣的身体の相互関係を読み込むのは危険だろう。

ただし、もし習慣的身体という語を用いることを擁護するならば、性器の運動を扱える点に着目することになるだろう。さきほど、幻影肢が「即自的に操作可能」とされていたことに注意を促した。この点は、トランスジェンダーの身体と幻影肢の議論を重ねて読む上で大きな重要性を持つ。なぜならば、性器の運動は基本的に不随意的だからである。むしろストレートの人々にとっては、例えば触るというような形で性器に働きかけることは可能であり、この意味においてその性器は欠損ではなく、また現勢的身体の一部をなしているということもできる。しかし同時に、性器を自由に操作するということは不可能でもあるのだ。現勢的身体においてすら、そしてストレートの——より踏み込んでいえば、メルロ＝ポンティがおもに考

²² Merleau-Ponty, *op. cit.*, p. 91.

²³ 米沢泉美編著『トランスジェンダリズム宣言』社会批評社、2003 年、p. 177。

²⁴ 例えば吉野は、同化・埋没（トランスジェンダーと気づかれずに、以降先の性別として社会で生活すること）をあえて拒否し、「移行中」ととどまることの重要性を強調する。Cf. 吉野寛『誰かの理想を生きられはしない——取り残された者のためのトランスジェンダー史』青土社、2020 年、p. 58。

察の対象とした、ストレート男性の——身体においてすら、性器は随意的に動かすのが困難なものなのだ。

この運動性という要素が、メルロ＝ポンティの身体図式の説明において重視されている点だということは先に述べた。そこで、この性器の運動を考えるために、身体図式と運動の関わりを検討しよう。

5. 身体図式と運動性——トランスジェンダー身体の「運動」

まずは、メルロ＝ポンティの記述を引用することから始めよう。

もし身体空間と外部の空間がある実践的体系をなし、前者は我々の行動の目的としての対象がその上に切り離されるための地あるいはそれがその前に現れることができる空虚だとすれば、明らかにこの行動の内でもその身体空間性は完成され、自己の運動の分析によってそれをよりよく理解できるようになるに違いない。身体を運動において考察することで、身体がいかに空間（そしてさらには時間）の内に住まうかがよりよく理解できるのだが、それは運動というものが空間及び時間を被るだけでは満足せず、それらを能動的に引き受け、既に与えられた状況の陳腐さの内では消されてしまう根源的な意味作用においてとらえ直すからである。

Si l'espace corporel et l'espace extérieur forment un système pratique, le premier étant le fond sur lequel peut se détacher ou le vide devant lequel peut *apparaître* l'objet comme but de notre action, c'est évidemment dans l'action que la spatialité du corps s'accomplit et l'analyse du mouvement propre doit nous permettre de la comprendre mieux. On voit mieux, en considérant le corps en mouvement, comment il habite l'espace (et d'ailleurs le temps) parce que le mouvement ne se contente pas de subir l'espace et le temps, il les assume activement, il les reprend dans leur signification originelle qui s'efface dans la banalité des situations acquises.²⁵

(斜体は原文)

まず注目すべきは、身体空間が「地」とされていることである。メルロ＝ポンティは、身体空間は自身の諸部分を包み込むものであり、その目標をその前に現出させるための非—存在の領域だと説明する²⁶。身体は、例えば「手が右上にある」といった形式ではなくて、ある任務に向かう姿勢として私に現れてくる。つまり各部位がある位置に展開されるというような位置の空間性を持つのではなく、ある状況の空間性を持つのだ²⁷。ここにおいて身体空間は外部の空間

²⁵ Merleau-Ponty, *op. cit.*, p. 119.

²⁶ *Ibid.*, p. 117.

²⁷ *Ibid.*, p. 116.

と区別され、ある対象が行動の目的であるとき、それは外部の空間から身体空間の上に切り離されることになる。そして身体を空間的・時間的に統一するもの、身体諸部分を積極的に己のうちに統合するものが、身体図式なのである²⁸。さらには、単に身体が空間ないし時間のなかに「ある」のではなく、「住まう *habiter*」のだという言葉遣いをしていることにも注意しなければならないだろう。身体を各部位に切り分けて考えることができないというのは言うまでもないが、身体が運動するとき、空間と時間が単なる点の連続であるということもない。運動の各瞬間は全運動の広がりを含むものであり、現在の知覚は、先行する知覚を現在の位置から再把握することで成立する。身体は必然的に「ここ」に、そして「いま」存在するのである²⁹。

それでは、この議論をトランスジェンダー身体に適用するとき、何が問題になるだろうか。もしそれ特有の運動があるとするならば、それは性器に関わる運動である。例えば自らの性器に触れたりそれを指さしたりという形で性器に能動的に働きかけよと言われた場合、その要求に従うことはできる。しかし前章でも述べた通り性器の運動は不随意である場合も多く、それを同様の議論から扱うことができるかどうかは、必ずしも明らかではない。以下では、この問いを検討しよう。

メルロ＝ポンティの記述に出てくる症例は精神盲 (*les cécités psychiques*) と呼ばれる者のそれを中心であり³⁰、不随意的な運動に関する記述はあまりないが、役立ちうると思われるのは、ある抽象的行為³¹の命令に全身で従ってしまうという例である³²。彼が紹介するのは、軍隊式敬礼を命じると敬意を表現する他の外的特徴をも示してしまったり、右手で釘を打つ仕草をするよう命じると、左手は命令されていないにも関わらず釘を支える仕草をしてしまったりする患者であるが、ここには随意性と不随意性の両面がある。彼の説明するところでは、正常な被験者であれば現実的な身体をその生活上の状況から脱却させ、想像の内でこれを扱うことができる（全身で命令に従うまでもなく、単に右腕で敬礼をしたり、釘を打つ真似として右手を上下に動かしたりするだけで済ませることができる）はずが、この患者の場合、その運動が対応する実際の状況の内に自ら身を置くことによってしか命令に従うことができない（立って「気を付け」の姿勢をもったり、左手で釘を支える仕草をもしたりしてしまう）のである³³。またこうした患者の身体についてメルロ＝ポンティは、「明らかに病人が自分の身体を配列するのは、現実の運動のみが分割と分節を導入してくる不定形な量塊としてでしかない *Visiblement le malade ne dispose de son corps que comme d'une masse amorphe dans laquelle seul le mouvement effectif introduit*

²⁸ *Ibid.*

²⁹ *Ibid.*, p. 163–164.

³⁰ *Ibid.*, p. 119–127.

³¹ 腕を挙げる、自分の鼻を指さすなど、特定の目的を持たない運動のこと。反対に、実際にコップを持ち上げたり、ランプに火をつけたりする運動を具体的運動という。メルロ＝ポンティはここで、後者の運動はできるのに前者の運動ができない患者について報告している。Cf. *ibid.*, p. 119–120.

³² *Ibid.*, p. 121.

³³ *Ibid.*, p. 121–122.

des divisions et des articulations」³⁴と述べる。健常者において機能している運動の地が機能していないために運動が生気づけられず、実際に体を動かすことによってはじめて自らの身体を「発見」するのだ³⁵。ここにおいて、身体はその統一を失っている——身体図式がその身体を統合することに失敗しているといえることができる。しかもそれは抽象的運動に限られるのであった。メルロ＝ポンティは「具体的行動の地は与えられた世界であり、他方抽象的行動の地は構成されている le fond du mouvement concret est le monde donné, le fond du mouvement abstrait est au contraire construit」³⁶と述べていることを考えれば、抽象的行動にまつわる不随意的な運動は、ある任務へと向かう姿勢を欠いているのである。

それでは、トランス身体における不随意的な性器の運動についてはどのように捉えることができるだろうか。陰茎の勃起は現勢的身体の運動であるが、それは必ずしも本人の内で統合された身体部位ではない。藤高が紹介した当事者の語りのように、自らが持たないはずの性器の感覚が幻影肢的に感じられることがある一方で、実際の性器が運動する——それが不随意的なものであったとしても——ことによって、その身体部位を「発見」することになる。これは先に述べた、精神盲患者において統合が失敗しているのと相同的である。ここにおいて、トランスジェンダーが感じる身体を統合するものとして、身体図式という語を用いることには妥当性があるといえるだろう。

ここで考えなければならないのは、身体図式が統一する身体が持つ「状況の空間性」、あるいは「姿勢」というものがここでどのように現れているかということである。そこで次節では、『知覚の現象学』第1部第5章「性化された存在としての身体 Le corps comme être sexué」の記述を確認しながら、メルロ＝ポンティが性というものをどのように考えていたか考察する。

6. 性器と身体図式——性器の、あるいはセクシュアリティの空間性

メルロ＝ポンティは、この章をシュナイダーという患者の例示から始める。彼は自ら性行為を求めることが一切なく、性的に無気力であるという³⁷。その理由を、通常性感帯を強勢し、ある性的表情を描き出すはずの性的図式 le schéma sexuel が変質したことだとメルロ＝ポンティは説明する³⁸。さらに重要なのは、他者との関係について触れた次の箇所である。

³⁴ *Ibid.*, p. 128.

³⁵ *Ibid.*, p.127–128.

³⁶ *Ibid.*, p. 128.

³⁷ *Ibid.*, p. 181.

³⁸ *Ibid.*, p. 182–183. この「性的図式」という語は本書中1度しか出てこないが、論者の一人、ゲイル・サラモンはこの語に大きな重みを置いている。それが厳密に個人的なものであると述べられていることから、身体形態こそが性感帯によって規定されるのだと主張する（Cf. ゲイル・サラモン『身体を引き受ける——トランスジェンダーと物質性のレトリック』藤高和輝訳、以文社、2019年、pp. 78–80）。

最後に、生物学的実存は人間の実存に連動し、それ固有のリズムと無関係だということは決してないということは先に述べた。しかしながら、いま付け加えるべきは、「生きること」(leben)は、そこから出発してあれこれの世界を「体験すること」(erleben)を可能にする原初の作用であるということ、そして我々は、知覚し、関係性の生活に入る以前に栄養を取り呼吸しなければならない、人間関係の生に入る以前に、視覚により色・光にたいして、聴覚によって物音にたいして、セクシュアリティによって他者の身体にたいして在るのでなければならないということである。したがって、視覚、聴覚、セクシュアリティ、身体は、単に人格的実存の通過点や道具、表明であるだけではない。人格的実存は、与えられる無名な実存を自らのうちに引き取り、収集するのだ。

Enfin, nous disions tout à l'heure que l'existence biologique est embrayée sur l'existence humaine et n'est jamais indifférente à son rythme propre. Cela n'empêche pas, ajouterons-nous maintenant, que « vivre » (*leben*) soit une opération primordiale à partir de laquelle il devient possible de « vivre » (*erleben*) tel ou tel monde, et que nous devions nous nourrir et respirer avant de percevoir et d'accéder à la vie de relation, être aux couleurs et aux lumières par la vision, aux sons par l'ouïe, au corps d'autrui par la sexualité, avant d'accéder à la vie de relations humaines. Ainsi la vue, l'ouïe, la sexualité, le corps ne sont pas seulement les points de passage, les instruments ou les manifestations de l'existence personnelle : elle reprend et recueille en elle leur existence donnée et anonyme.³⁹

ここで「生物学的」という語が用いられているのは、感官および脳の諸領域における反応について議論していることを承けたものである。ことトランスジェンダーについて議論する場合「生物学的」という語は重みの掛かった語であるが、この箇所での意味を読み込むことは不合理であろう。そして最も着目すべき点は、セクシュアリティによって他者の身体に対して在る、と述べられていることである。セクシュアリティは個人において絶対的なものとしてあるのではなく、それによって我々は他者と関係を持つことになるのだ。このことは、前節で課題となった「姿勢」を考えるうえで重要となる——セクシュアリティが他者との関係を含み持つならば、その身体空間も他者へと差し向けられることになるからだ。

注意しなければならないのは、前節でわれわれが議論していたのは「性器」であったのに対し、本節では「セクシュアリティ」が中心に扱われているということである。メルロ＝ポンティは、セクシュアリティを性器のみへと還元することはできないという立場をとり、セクシュアリティはある雰囲気 *une atmosphère*⁴⁰として、常に人間的生活に現前しているのだと主張する

³⁹ *Ibid.*, p. 186.

⁴⁰ この語もまた、フェミニスト現象学やトランスジェンダー研究でよく利用されるものである。例えば町田奈緒士は、シスジェンダー女性／男性を装って生活するトランスの人々の経験を説明するのに「雰囲気」という概念を援用している (Cf. 町田奈緒士『トランスジェンダーを生きる——語り合いから描く体験の「質感」』ミ

41。そして身体図式を引き合いに出して、性は意識作用の対象とならずとも、自身の経験の特権的な形態を動機づけることが可能になると述べるのである⁴²。

この議論をトランスジェンダー身体に適用することを考えよう。普段の人間関係において他者の性別を判断しようとする際、実際に女性器／男性器がついているかどうかを確認することはほとんどないだろう。性器でない身体部位、あるいは特定の部位ではなく佇まいや動作によって性別を判断することすらある。これは彼が説明したことと相同的であり、またトランスジェンダーの人々の経験にも沿うものといえそうだ。しかし注意しなければならないのは、SRSによって自らの性器を切除することを望むトランスセクシュアルの人々である。すなわち、そこで問題になるのは性器そのもの——必ずしも他者との関係が介在しないものなのだ。むしろそうした人々も当然他者と関係する場面はあり、完全に自らのうちに閉じこもっているというわけではない。しかしこと性器という身体部位に拘う場合、そこには必ずしも他者との関係性が介在しないことになり、するとその「姿勢」を先述したような形で考えることができなくなるのである。

このことはむしろ、トランスセクシュアルの人々の逼迫した状態を示しているということができるかもしれない。セクシュアリティは必ずしも性器のみに還元されるものではないという前提のもとで、それでもその身体部位は不随意的な運動によって常に「発見」しなおされ、統合に失敗する。何らの「姿勢」あるいは「状況の空間性」を持たないままに蠢くその部位は、すでに「即自的に操作可能」なものですらなくなっているのだ。これは、SRS という選択の重み的一端を示す事例といえるだろう。

7. 結論

以上、『知覚の現象学』の記述に立ち返ることによって、「習慣的身体」「身体図式」といった概念をトランスジェンダー身体にいかに関用することができるかを考察してきた。前者は現勢的身体と相互関係を必然的に持つことから、両者が相克するトランスセクシュアルの人々の経験を見損なう危険がある一方で、自身の身体を包括する身体空間において身体に時間的・空間的統合を与える、非人称的な地をなす後者は、メルロ＝ポンティが提示している精神盲の例とも相同性があり、トランスジェンダー身体を考察する場合にはより適合的である。また、彼は身体図式と運動性を結び付けて議論しているが、これを不随意的な運動に拡張して考えると、通常意識されていない性器が運動することによって「発見」され、身体図式による統合が失敗することになる。さらに、メルロ＝ポンティはセクシュアリティを他者と関係するうえで必ず必要なものと主張しており、これはトランスジェンダー主体の「姿勢」を考えるうえで重要な

ネルヴァ書房、2022 年、p. 146）。紙幅の都合上、今回は深入りしない。

⁴¹ *Ibid.*, p. 196–197.

⁴² *Ibid.*, p. 197.

論点となる。トランスジェンダーの中でも性器への侵襲的な介入を望まない人々にとっては、ときにその不随意的な運動が身体の統合を損なうことがありつつも、他者との関係へと向かう姿勢の中で、性器だけに還元されないセクシュアリティがそこに現前する。他方、あくまで性器がその問題の中心をなすトランスセクシュアルの人々にとっては、必ずしも他者との関係が介在しない、すなわち運動の姿勢が成立しないままに性器が不随意に動くことで、身体図式による統合が常に失敗し続けることになる。そしてその運動は、自らの意思で開始することも停止することもできないという意味において、即自的に操作可能でなくなっているのである。この意味で、トランスセクシュアルの人々にとって SRS がいかに重要な意味を持つかということをも示すことができたといえる。

本稿では、先行研究において同一視されていた語を峻別することで、広い幅を持つトランスジェンダーの経験をより包括的に描出することを試みた。フェミニスト現象学のように、元の文脈を読み替え、ときにはあえて踏み外すことが必要となる場面においても、原テキストに拘ることには一定の価値があるといえるだろう。

参考文献

- Merleau-Ponty, Maurice, *Phénoménologie de la perception* [1945], Gallimard, « Tel », 2002 (『知覚の現象学 1』竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、1967 年、『知覚の現象学 2』竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、1974 年)。
- 加國尚志「『知覚の現象学』第一部——世界内存在としての身体」『メルロ＝ポンティ読本』松葉祥一・本郷均・廣瀬浩司編、法政大学出版局、2018 年、pp. 54-64。
- サラモン、ゲイル『身体を引き受ける——トランスジェンダーと物質性のレトリック』藤高和輝訳、以文社、2019 年。
- 田中彰吾「身体図式と身体イメージの区別——その現象学的考察」『日本心理学会大会発表論文集』2010 年、第 74 巻、p. 3。
- 中澤瞳「フェミニズムとメルロ＝ポンティ——規範を生きる身体の経験」『メルロ＝ポンティ読本』松葉祥一・本郷均・廣瀬浩司編、法政大学出版局、2018 年、pp. 320-327。
- 藤高和輝『ノット・ライク・デイス——トランスジェンダーと身体の哲学』以文社、2024 年。
- 町田奈緒士『トランスジェンダーを生きる——語り合いから描く体験の「質感」』ミネルヴァ書房、2022 年。
- 吉野靱『誰かの理想を生きられはしない——とり残された者のためのトランスジェンダー史』青土社、2020 年。
- 米沢泉美編著『トランスジェンダリズム宣言』社会批評社、2003 年。